第26回 山梨県介護老人保健施設大会抄録用紙

演 題	もう一度食べる喜びへの支援
副 題	～想いをつづるノートから見えたこと～

フリガナ	カイゴロウジンホケンシセツ　コウシュウケア・ホーム
施 設 名	介護老人保健施設　甲州ケア・ホーム
フリガナ	カイゴフクシシ　カジハラミナミ
発表者(職名・氏名)	介護福祉士　梶原南海

【はじめに】

当施設では、看取りの件数が年々増えてきている中、オリジナルのエンディングノート(以下想いをつづるノート)を活用し、その内容を看取り支援に反映させている。以前は想いをつづるノートを活用していなかったため、看取り対応となる頃には、ご本人からの聞き取りが難しいことが多く、利用者主体ではなく、家族や職員が普段の関りからケアを考えることが多く、本人の望んだケアができたのかと悩むこともあった。想いをつづるノートの活用を始めてからは「食事」に対しても本人の思いや嗜好等の情報収集ができ、看取り対応になっても食事の「喜び・楽しみ」をもう一度感じてもらう支援ができた。今回、想いをつづるノートの必要性を再認識することができた為、以下に報告する。

【目的】

・想いをつづるノートを活用し、利用者主体で食べる楽しさ、喜びを感じてもらう。

≪事例紹介≫氏名：W・S様　９９歳　女性　要介護３

主病名：卵巣腫瘍　高血圧症

ADL：リクライニング車椅子使用。意思疎通は可能。生活動作全介助。食事動作は小鉢を持って摂取可能。

≪経過≫

卵巣腫瘍により腹囲の増大がある事や、高齢という事もあり、徐々に食事量が低下し、栄養補助飲料も残す事が多くなった。職員の介入も行ったが、摂取量に大きな変化はなく看取り対応となる。利用者は「ここのご飯は美味しくない。」とも言われ、食べる事に楽しみを感じなくなっていた。家族からも、本人の想いを尊重して欲しいとの要望が強く聞かれていた。想いをつづるノートには、好きな食べ物は「寿司」他にもアイスや缶詰が好きとの情報もあった。職員からも、最期は好きな食べ物で、食べるという楽しみを感じてもらいたいとう話しが上がりケア内容を検討した。

【方法・支援内容】

①売店で、本人が食べたい物を選んでもらい購入。無理のない範囲で、もう一度食事を楽しめるスケジュールを作成。

② 想いをつづるノートから抽出した物や食べたい物を、家族に依頼する。

③身体への負担を考え、間食の提供機会を１日５回と増やす。また、栄養補助食品の提供方法を嗜好に近づける為冷凍し、アイスにして提供した。

【結果】

・想いをつづるノートから、好きな物を提供することで、以前よりも笑顔が増え、以前はあまり聞かれていなかった「美味しい。」という言葉が増えた。

・好んでいた物や嗜好に近づけ提供することで、摂取量の増加に繋がることが可能であることがわかった。

・職員が、利用者とコミュニケーションを図り、家族への情報収集や情報提供ができていたことで、利用者や家族、職員の関係性が構築され、食べたい物を食べたい時に提供することで、本人の想いに寄り添うことができた。

【考察】

想いをつづるノートを活用し、生活史やその時々の想いや考えが見える化されているため、看取り期に入ってからも迅速にケアへ反映させる事が可能となった。今回の事例のように「食べる」という事に関しても、想いをつづるノートがあったからこそ、食べたい物や好きな物をその時の状態に合わせることができた。本人の想いを尊重しながら嗜好や様々な視点からのアプローチが行え、もう一度食べる喜びへの支援に繋がり、最期まで食事を楽しむ事ができたのではないかと考える。また、過去の情報と現在の想いをすり合わせながらケアへ反映させていく事が可能になった。その為、利用者の情報収集は、入所時からこまめに行い更新していく事が重要である。想いに寄り添い、最期までその人らしい生活の実現が出来るよう支援を行う上で、想いをつづるノートは有効的な手段と考える。

【おわりに】

想いをつなげるノートは、過去、現在そして未来へつなぐために必要なものであった。今回の事例を通して、看取り対応になる前から、想いに寄り添い実現させることで、その方の喜びや生きがいに繋がってほしい。利用者が元気な時から望む生活が充実する支援を広げていくことが今後の課題である。